

グローバル時代における国際結婚と社会統合に関する社会学的考察

－日本における都市部の中国人国際結婚女性を事例に－

郭 笑蕾

本研究は、日本の都市部に暮らす日本人男性と結婚した中国人女性を対象とし、国際結婚と社会統合をめぐる状況を明らかにすることを目的とした。とりわけ、国際結婚が発生する要因を明らかにしたうえで、彼女たちがどのように日本社会に統合していくのかというプロセスの諸相を探求した。

上記の問題意識のもとで、本研究は、グローバル時代における国際移民の現状を移民の女性化の表れとして位置づけた。そして先行研究の批判的考察を踏まえて、国際結婚をした中国人女性がどのような国際移動を経験し、どのように国際結婚を選択するのか、結婚後に日本社会でどのようなキャリアを歩むのか、定住に関してどのような計画を持つのかといった具体的な論点を検討した。そして、中国人国際結婚移住女性が経験している移動の多様化を示し、彼女たちが日本社会で直面している様々な制限や、それを乗り越えるために活用している諸資源の多様性について考察し、彼女たちの国際結婚と社会統合における主体性の側面を強調した。これらを通じて、国際移動が活発化する時代に出現した、日中国際移民女性の新たなイメージを描くことを試みた。

以下では、各章のまとめを行う上で、本研究の研究結果を提示する。

第一章では、グローバル時代における国際移民の特徴と日本において国際結婚が急増している背景を明らかにした。異なる社会的、経済的、文化的な背景をもっている人が、ますます多く、異なる国から様々な国へと移動しつつある。欧米諸国やオーストラリアに加えて、アジア諸国にも多くの移民が存在している。特に日本と中国

は、アジアにおける主要な移民の受け入れ国と送り出し国になりつつある。国際移民のもう一つの特徴としては、移民の女性化が挙げられる。先進諸国において、女性の社会的地位が徐々に改善する中、家事労働・育児・高齢者への介護といった再生産労働では、人手不足という現象が発生している。この空白を補うために、発展途上国からの女性移民に頼りがちになるという状況が生まれている。これが、国際移民の女性化の背景にある。この移住労働者の女性化には、国際結婚という道を通して移民となる女性も含まれる。

第二次世界大戦後、占領軍であるアメリカ軍やその関係者と出会い、結婚する日本人女性が増加した。この時期の国際結婚においては、日本人女性は欧米での豊かな生活に憧れて、当時経済力などにおいて劣位にあった日本から移動する傾向があった。中でも、特にアジア人女性と日本人男性の国際結婚が目立つようになった。この国際結婚の増加は、人々の国際移動により出会い結ばれた結婚だけではなく、お見合い結婚や、日本の農村部における男性の結婚難から生み出された「国際結婚紹介所」といった仲介機関により作り上げられた側面が大きかった。また、日本人男性と結婚した外国人女性の数は、日本人女性と結婚した外国人男性の数よりかなり多いことは、日本における国際結婚の特徴の一つである。

第二章では、日本の国際結婚に関する先行研究を検討し、日本における国際結婚移住女性はどうのように捉えられてきたのかを明らかにした。まずは、国際結婚の発生要因として、経済的要因、ジェンダー的要因、国際的な移動要因、グローバル・ハイパーガミー、ライフスタイル移住、地域間のつながりといったさまざまな歴史的・文化的要因が関わることが明らかにされた。一方、国際結婚移住女性は、受け入れ国へと統合していく過程において、様々な問題に直面せざるをえない。本章では国際結婚移住女性の受け入れ社会への統合を、就労による労働市場への統合、受け入れ社会での定着という順で提示した。

移民の就労に影響を与える要因としては、社会関係資本と人的資

本の役割がしばしば指摘されてきた。移民の人的資本が、労働市場への統合に与える影響を考察する研究もある。しかし、インターマリッジが移民の収入、あるいは社会経済的地位に正の影響を与えるか、負の影響を与えるかについてまだ明らかになっていない。そして、日本における国際結婚女性の就労に関しては、家庭内の再生産労働に注目する研究が多く、家庭外での労働市場への参加に関する研究はまだ少ない。日本における国際結婚移住女性はどのように労働参加するか、就労内容はどのようなものなのか、その過程において、国際結婚は利点であるかどうかについては、さらに実証的な検討をする必要がある。

さらに、従来の研究は様々な事情から農村・地方部における「外国人花嫁」の事例に集中する傾向があった。また、彼女たちを「弱者」すなわち構造的な犠牲者として表象する傾向があった。そのような傾向を批判し、女性たちの主体性を強調する研究も存在したが、それもあくまで受け入れ社会における社会規範や社会構造、家族規範や家族構造の制限下での主体性の考察に過ぎなかった。そのような考察では、送り出し社会とのトランスナショナルな関係性は見落とされている。また、都市で暮らす国際結婚女性も増加しつつある今日、よりバランスのとれた現状把握のためには、農村地域外の状況を見ることが重要であると指摘した。一方、国際結婚女性の移住に関する研究は、彼女たちが日本社会に適応し永住するということを暗黙の前提にしがちであり、トランスナショナルな移住形態の多様性という視座が不足しているとも言える。

第三章では前章を踏まえ、本研究の研究視点と分析枠組みを提示した。まず、国際移民が出身国における家族や友人などとコミュニケーションを保ったり、経済的な援助をしたりすることで、出身国と様々なつながりを保持する様子を考察するために、トランスナショナリズムの視点を提示した。グローバリゼーションが進展し、人々の移動が活発化しているなかで、国際結婚女性の移動の理由は多様化している。そこで、国際結婚とトランスナショナルな移動の主体

や移動のあり方を、多角的な視点から考察する必要性に言及した。次に、第二章で検討した日本における国際結婚を分析する研究のほとんどは、低階層の女性を対象とする質的研究に偏重しているという点を踏まえたうえで、女性の国際結婚と社会階層との関連がさらに検討される必要があることを指摘した。そして最後に、ライフコースの視点と主体性の視点を提示した。すなわち国際結婚移住女性のライフコースの形成において、どのような要因が影響しているのかを分析することが、彼女たちの全体像を把握するには不可欠であると指摘した。また、本研究における30名の調査協力者の一覧表と属性に関する紹介も第三章の最後で行われた。

以上のような分析枠組みに基づき、第四章から第六章では30名の日中国際結婚移住女性の語りを題材として、彼女たちが経験する国際移動、国際結婚、キャリア形成による社会経済的統合、定住の選択といった過程を理解しようと試みた。

第四章では、グローバル時代における日中国際結婚の発生に影響を与える諸要因について考察した。それは、グローバル化の時代におけるトランスナショナルな移動の発生によりもたらされた結婚相手との出会いの場の増加・多様化と、言語や文化への関心や外国人への態度、国際結婚女性の主体性といった要因である。それらの要因によって、本研究の調査協力者である高学歴の国際結婚女性が、結果的に学歴・階層的な同類婚を選択したことが明らかになった。

トランスナショナリズムの視点からみれば、中国における経済的な発展及び欧米、日本といった先進国の教育資源への憧れによって生じた、留学ブームが指摘された。そのような背景の中で、国際結婚する前に、留学や就職といった形で中国から日本への移動を既に経験している調査協力者は多かった。また、中国における伝統的なジェンダー規範からの逃避、中国でのキャリアの展開の難しさも移動の主なる要因となっていると考えられる。国際移動は日本人との接触機会を拡大し、国際結婚の可能性も高める。それに加えて、日中間における貿易の発展や中国文化への憧れによって、日本人男性

が結婚する前に日本から中国へと移動すること、国際結婚の前提になっていることが確認できた。

国際結婚する前になされた国際移動の背景には、国際結婚女性が出身家庭からサポートを受ける傾向にある。国際移動を経験した調査協力者の大半は、都市部の中間層家庭の出身であるため、海外に留学することに親からの経済的なサポートと情緒的なサポートを受けていたことが確認された。

また、国際結婚が生存戦略ではなく、学歴・階層同類婚の特徴を持ちうることを示した。本章で分析した国際結婚の事例は、教育レベルが近く、同じ価値観、ライフスタイルを持っている国際結婚夫婦によるものであった。本章で明らかにした、こうした国際結婚女性における配偶者選択の特徴は、言葉・文化がもたらす効果である。国際結婚を通じて、将来の様々な可能性が開かれ、未知性にあふれ挑戦できる人生を送れると考えている女性もいる。そこには、国際結婚女性の主体性が見え、それにより彼女たちは自らのライフコースを形成してゆくのである。

第五章では、日本に居住する6名の日中国際結婚移住女性の事例を取り上げ、彼女たちのキャリア形成に影響を与える諸要因と、新たに開拓されるキャリアの可能性を詳しく考察した。

まず、彼女たちのもつ社会関係資本と人的資本のあり方が、来日当初のキャリア選択、とりわけ仕事形式に大きな影響を与えることが明らかになった。日本人とのネットワークを所有しておらず日本語が流暢に話せない場合、日本の労働市場に関する情報が入手しにくく、日本の労働市場への統合がは難しくなる。逆に、日本人とのネットワークを持ち、日本語が話せる人は、正社員として日本の労働市場に入る可能性が高くなる。それを階層的な視点から見れば、両親の経済的なサポートを受けることで留学することができ、日本人とのネットワークを強めることができ、それを社会関係資本として活用することにより、順調に日本の労働市場に入ることができるのである。また出身階層の差異により、来日時の就職に対する意欲

も異なってくる。都市部出身の調査協力者は、留学を通じて来日し、自分のライフスタイルを追求し、価値を発揮するため、高い就職意欲を持っている。しかし農村部出身の調査協力者は、結婚自体を目的として来日する傾向があり、就職意欲は比較的低い。

しかし、結婚出産により仕事が一時的に中断されることも多い。これは日本社会における専業主婦規範がキャリア形成に与える消極的な影響であろうと考えられる。ほとんどの国際結婚女性も、日本人女性と同じような状況に直面しなければならない。しかし、中国にいる両親をトランスナショナルな社会関係資本として活用し、育児サポートを得ることが可能である。そのサポートを受けることで、一部の国際結婚移住女性は結婚・出産を経験していても、キャリアの継続が可能になっている。

また、本章で明らかにされた知見としては、国際結婚移住女性のキャリア形成がライフコースの進展とともに変容するということがある。日本社会での生活年数の増加につれ、国際結婚移住女性は自分なりの社会関係を発展させ、社会関係資本と人的資本を蓄積していく。当初、キャリアが制限される国際結婚移住女性は、自らの主体性を発揮することで、社会関係資本を蓄積・利用し、新たなキャリアの可能性を開拓する。その典型としては、ネットワークによって維持された代購というビジネスである。

そして、トランスナショナリズムの視点からの考察である、トランスナショナルな移動により親が定休する育児サポートや、中国における中国人とのネットワークによって開拓された新たなキャリア形式は、国際結婚移民女性の日本の労働市場への統合に大きな影響を与えていることが、本章の分析により明らかにされた。このように本章は、受け入れ社会の状況について分析するだけでなく、送り出し国との関連性に留意することで、トランスナショナリズムの視点から国際結婚移住女性の受け入れ社会での労働市場への統合を捉える可能性を提示してきた。

最後に、国際結婚と受け入れ社会における労働市場への統合の関

係性について、本章の分析結果を踏まえ、日中国際結婚の文脈に沿って考察する。ただし、中国人同士の結婚と、日本人同士の結婚は分析の対象外であるため、本研究の分析対象者と比較することは難しい。第二章での先行研究の整理で検討したように、欧米の量的研究においては、曖昧なまま明らかになっていなかった。日中国際結婚移住女性の事例を分析する限り、国際結婚と受け入れ社会における労働市場への統合の関係性は女性の出身階層によって強く規定されている様子が見られる。都市部出身の女性は、国際結婚する前に自分のニーズに即した望ましい就業機会を得ることで、順調な統合を経験する傾向がある。しかし、これらの女性が国際結婚することによって、日本社会における専業主婦規範を内面化し、キャリアを中断するか、やむを得ず転職するといった形でキャリアの下方移動を経験する側面も見られた。むしろ農村部出身の女性には、このような傾向が見られない。本章で得られた知見からは、国際結婚と労働市場への統合の関係性に関する分析には、国際結婚女性内部の差異に着目することが重要であろうと指摘できる。

第六章では、国際結婚移住女性の定住に関する意識とその決定に影響を与える要因について分析した。調査時点ですべての調査協力者は日本に居住しているが、将来どこに住むかについては、確定していない調査協力者が多く、フレキシビリティのある定住のあり方が明らかにされた。一方、必ず日本に定住する、あるいは日本での定住を諦め、中国に帰国することを決めた事例もある。それぞれのパターンには様々な要因が絡みあって影響を与えている。

日中国際結婚移住女性は、日本の労働市場における昇進の困難や、日本人とのネットワークの薄さ、中国に居る両親への介護といった問題に直面するため、将来日本に定住していくことについて不安やためらいを感じていることが示された。このような不安を解消するため、女性たちは自らの主体性を発揮することで積極的に様々な戦略を取っている。それは、中国人とのネットワークを構築することや、さまざまな集団を準拠枠として比較し、自らの置かれる状況に

納得すること、そして、宗教に帰依することである。これらの戦略を取ることで、女性が主体的な行為者として自分の定住や日本での生活を把握する様子がうかがえる。

本章の分析から明らかにされた一番重要な知見は、日中国際結婚女性は日本に居住しても、日本と中国の間のトランスナショナルなつながりを保ち、それが将来のトランスナショナルな移動の可能性を高めていることである。トランスナショナルなつながりには、経済的な面（中国での不動産を所有すること）と制度的な面（日本に帰化せず、永住者という在留資格を保つ）がある。ここではグローバル時代において、トランスナショナリズムが国際結婚移住女性の定住と社会統合に与える影響が見られる。これらの国際結婚移住女性の社会統合は一方的に日本で定住することによって達成されるものではなく、中国とのつながりを保ちながら、もしくは積極的に構築しながら進行しているのである。このようなトランスナショナルな生活ができるのは、社会関係資本、人的資本、または「人生は旅である」というように、頻繁的な移動により獲得してきたハビトゥスが役割を果たしているからだと言えるだろう。これも特に、都市部出身の国際結婚移住女性に顕著に見られる特徴である。

また、国際結婚移住女性の定住意識はライフコースによって規定されていることも本章の分析によって示唆された。子育ての時期に「妻役割」、「母役割」といった役割規範に強く影響を受け、日本に定住する傾向が見える一方、定年時期にいる女性は、好きなライフスタイルを追求するため、または、中国に居る親の介護を行うために、トランスナショナルな生活を送っていることが明らかにされた。また、高齢になったら、自分の中国人としての「根」（ルーツ）に戻るため、日本での定住をやめ、中国に戻る可能性が大きいことが女性の語り方から読み取れる。もちろん、異なるライフコースの段階における定住志向の違いには、女性が持つ社会関係資本と人的資本の影響が見られる。社会関係資本、人的資本をそれほど多く保有していない国際結婚移住女性は、より高い日本への定住志向を示して

いる。それらの女性は、日本労働市場への統合がより弱い、結婚による取得した「妻役割」、「母親役割」を強く内面化することで、日本での家庭を守るために定住していこうとする傾向が見られる。一方、定住志向が弱く、トランスナショナルな生活を送ることを可能にしているのは、加齢とともに蓄積されてきた移動の資本が重要な役割を果たしている結果だと言えよう。

以上、日中国際結婚移住女性の国際結婚と社会統合の実態について分析した。第七章にその結果についてまとめた。

第一に、本研究で取り上げられた国際結婚移住女性の事例からは、移動の多様化による出会いの場の拡大と、言葉や文化を介した親近性による配偶者選択は、ハイパーガミーという国際結婚の様式ではなく、同類婚を多く発生させることがわかった。また、第三章で述べた枠組みから、社会関係資本と人的資本が国際結婚と社会統合の関係性に与える影響について分析した結果、その関係性は階層によって規定されていることが明らかになった。また、出身階層の差異により、来日当初の就業意欲も異なってくる。中国の都市部出身の調査協力者は、留学を通じて来日し、自分のライフスタイルを追求し、価値を発揮するため、高い就業意欲を持っている。しかし、農村部出身の調査協力者は、来日当初の社会関係資本と人的資本が不足しがちであることに加えて、結婚自体を目的として来日する傾向があり、就業意欲は比較的低く、日本の労働市場への統合は比較的に弱いことが示唆された。一方、国際結婚移住女性の定住志向を見ると、それほど多く社会関係資本、人的資本を保有していない女性には、より高い定住志向が見られる。

第二に、本研究における日中国際結婚移住女性の分析から、トランスナショナリズムが国際結婚移住女性の定住と社会統合に与える影響が示唆される。具体的には、親による育児サポートを受けることによって、職業キャリアの継続が実現できているという点や、中国におけるトランスナショナルなネットワークにより、日本の労働市場への統合における新たなキャリアの形式が開拓される点である。

また、日中国際結婚女性は日本に居住していても、日本と中国の間のトランスナショナルなつながりを保つことで、将来のトランスナショナルな移動の可能性を高めることが示された。こうしたトランスナショナルな生活を可能にするのは、社会関係資本、人的資本、または「人生は旅である」という考え方という頻繁な移動を通じて獲得されてきたハビトゥスの役割によって導かれた結果であった。本研究における国際結婚女性は、比較的高学歴であるミドルクラス出身者が多く、トランスナショナルな移動を可能にする資本を比較的多く蓄積してきた人々である。その結果、彼女たちはトランスナショナルな移動によってそれに適合したハビトゥスを蓄積し、それがさらなるトランスナショナルな移動の可能性を提供する。

第三に、国際結婚移住女性のキャリア形成と定住意識がライフコースの進展とともに変容するということが明らかになった。キャリア形成の側面から見れば、ライフコースの進展や、日本社会での生活年数の増加につれ、国際結婚移住女性は自分なりの社会関係を発展させ、社会関係資本と人的資本を蓄積していく。このような主体性は、国際結婚移住女性が自分自身の社会関係資本・人的資本を規定する階層構造に制約されている。また、子育ての時期、定年期といった異なるライフコースの時期によって、定住に関する意識は異なっていた。子育ての時期における女性の定住意識は、「妻役割」、「母役割」といった役割規範に強く影響を受けていることが示唆され、より高齢の女性は、好きなライフスタイルを追求するため、または、中国にいる親の介護を行うために、トランスナショナルな生活を送っていることが明らかにされた。さらに高齢になれば、日本での定住をやめ、中国に戻る意向を示す女性もいる。

第三章で述べたように、本研究における主体性とは、個人がそれまでの経験や努力によって得られた能力を利用し、自らの人生軌道をデザインする能力を指している。本研究では、日中国際結婚移住女性の社会統合の過程における主体性のあり方が明らかにされた。女性として日本の職場で昇進困難に直面している国際結婚移住女性

は、社会関係資本・人的資本の蓄積や、トランスナショナルなネットワークを利用することで、新たなキャリアの可能性を見出していた。また、彼女たちは、日本の労働市場の昇進困難や、日本人とのネットワークの弱さ、中国にいる両親への介護といった問題に直面することから、将来日本に定住していくことについて不安やためらいを感じていた。それを解消するため、女性たちは自らの主体性を発揮することで、積極的に様々な戦略を取っている。

以上、本研究では、国際結婚移住女性の国際結婚の発生と、社会統合、すなわち、受け入れ社会の労働市場への統合と受け入れ社会での定住志向に影響を与える要因とその在り方を、トランスナショナリズムの視点から分析してきた。また、国際結婚移住女性のライフコースの進展とともに、社会統合の在り方は変容するが、いずれの段階でも階層構造によって強く規定されていることが明らかになった。